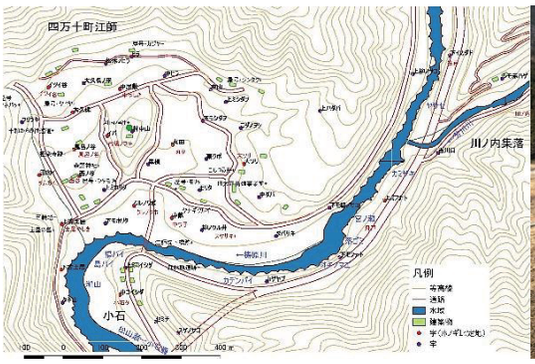
地域資料叢書１７

土佐の地名を歩く

－高知県西部地名民俗調査報告書Ⅰ－



奥四万十山の暮らし調査団編

発刊によせて

20 世紀の終わりから 21 世紀初頭にかけて、日本列島の農山村景観は大きく変貌した。その要因の一は圃場整備事業、二は山林業の衰退、三は過疎化である。

まず圃場整備事業により水田の形が大きく変わった。従前の水田および畦畔は等高線にあわせて曲線で描かれ、個性豊かな形状を示していた。整備後は区画化された直線的で周囲の等高線を無視した設計図通りの水田・畦畔に変わった。従前の水田は開田以来、基本的な形は守りながら維持されてきたもので、耕作・開田に機械力は使用されない。変化は小規模なもので、自然地形に従っていた。これらの個性豊かな水田には、固有名詞、呼び名が付されていた。地名は水田の形成以来の長い歴史を持つものが多く、平安時代の開田ならば、千年、奈良時代よりその村を支えてきた水田ならば千三百年の歴史があった。目の前にあって意識はしなかったが、実は古い歴史を持っていた田がことごとく消えていった。

二つ目は山林業の衰退。従前、炊飯・風呂など生活に必要な火力は山林からの薪に求め、暖は炭より得ていた。薪も炭も山のない町の人たちに売る商品であった。ガスの普及で燃料としての木の需要がなくなり、山の富を失った山村は、過疎になって、手入れもされない山林は荒廃していった。

土佐には有名な『長宗我部地検帳』がある。このように変化する以前には山と村の景観は、戦国時代の『地検帳』の世界にほとんど変わっていなかった。本書『土佐地名を歩く』の編者「奥四万十山の暮らし調査団」の中心メンバーである楠瀬さんは私が大学院教員だった頃に、ゼミ生であった。一度、物部川上流域の韮生槇山地域に一緒に調査に行ったことがある。その地域で聞き取りをすると、土地台帳地名である小字の他に、『地検帳』に書かれた地名が次々に住民の口から出てきて、驚き、感動もしたことだった。村人はまばらで、語り手は老齢化していた。こうした調査が可能である時間帯は限りなく短いことも自覚せざるを得なかった。その調査成果は『新・韮生槇山風土記－高知県香美市域 120 人に聞いた村の歴史・生活・民俗』として花書院より 2008 年に刊行されている。報告書は「地域資料叢書」と題するシリーズ の９冊目として刊行された。楠瀬さんは九州大学大学院比較社会文化学府地域資料情報講座に所属しており、講座の名前に由来するこのシリーズはその講座予算によって刊行されていた。今回楠瀬さんから再び本書を地域資料叢書の一冊として刊行したい旨の申し出をいただき、私は本当にうれしかった。第一には彼が大学を離れて新聞記者として活躍しながらも、調査を継続してくれていることである。調査時間に対応して成果は増えていく。地図印刷には経費が必要だから困難もあろう。しかし調査成果は公表して共有のものにしなければ、調査の意味が活かされない。第二には私は３年前に大学を退職しており、最近刊行した叢書 16 冊目の報告書が最後になるだろうと考えていた。すでに大学院は改組され、この名の講座はない。それでも楠瀬さんたちがこの叢書の名前を使ってくださって、さらに続巻報告書も叢書 18 として発刊するとのことだった。まことにありがたい申し出であった。おそらく楠瀬さんは叢書のうち４冊を自身が関わる編著とするであろう。

本報告書では地名を「民衆知」そのものとしている。地名は山の生活上で必要だからつけられている。その生活こそが蓄積された民衆の知恵なのである。本書を手にして現地に立てば、その地に長く継続されてきた農山村の暮らしと民衆知とを実感できる。ムラを見る目がはるかに深化されるだろう。

本書での地名地図は４大字６点であり、町歩き地図が３点。赤●が『地検帳』記載ホノギ（地名）、紫●が小字、▲が屋号で、＋が新出地名となっているから、読者は収集地名を実感できるだろう。また調査域はより広範囲であるから、残る部分は続巻にての刊行になるとのことである。

本書の刊行と、地域をみる眼差しの深まりを心から喜びつつ、巻頭の言葉としたい。

くまもと文学歴史館・館長　　服部　英雄

目次

発刊によせて
第１章　入門編―土佐の地名の調べ方―
１、はじめに・・3
２、本で学ぶ―地名の図書館―・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
コラム１　『長宗我部地検帳』とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
３、歩いて調べる－地名の歩き方―・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
４、九州大学式地名調査法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
５、本書の構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

第２章　実践編―四万十の地名を歩く―
１、位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
コラム２　下山郷と武士たち・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
コラム３　伊予・河野氏と土佐・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
２、四万十の地名・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
３、半家・・・27
４、宮内・・・32
５、江師・・・46
６、大正中津川・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56

第３章　地図編―森下画伯の地名地図―
１、はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67
２、霊峰五在所の森・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
３、五社街道・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70
４、中津川・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72

第４章　分析編―土佐の地名を探る―
１、四万十川語源考・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74
２、四万十山のアラカルト・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87
３、焼畑地名考・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・94
４、災害地名考・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・103

第５章　伝承編―地名を残し伝える―
１、地名の今―県内調査１０年に思う・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・110
２、公共データとしての地名・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・112
３、高知歴史環境ＧＩＳ研究会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・115

執筆者紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・116

第１章　入門編―土佐の地名の調べ方―

１、はじめに

多くの中山間地域を抱える高知県では、少子高齢化に伴う過疎化が急激に進行し（2015 年度の高齢化率は全国２位の 32.85%）、元高知大学教授の大野晃氏が 1990 年代に提起した「限界集落」（高齢化率 50%以上の集落）の問題が顕在化している[1)]。県内では過去 25 年で、住民の転居または死去により消滅する集落が数多く現れ、その結果、住民が語り継いできた地域の歴史や民俗の記憶も消失してしまっている。また、南海地震による津波などの災害に備えて、集落や地域の歴史を記録して残していくことが急務となっている。

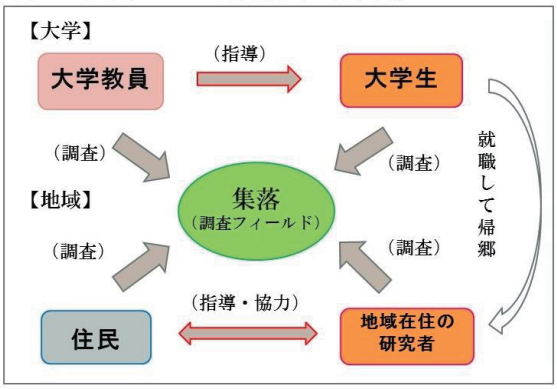
本書は、急激な過疎化により消失していく文字に残されていない集落住民の歴史的記憶「民衆知」を住民自らが記録し、後世に伝えていくことを目的としている。「民衆知」の中でも「地名」は、山地や海、河川、田畑など生業に伴う土地利用の中で用いられた呼称で、住民が長く語り継いできた歴史資料でもある。地域に残る地名には、行政の小字図等に記載されたもののほかに、住民しか知らない通称地名・屋号・小地名が数多く存在する。しかし、これら小地名は戦後の生業の変化により使用されなくなり、古老の記憶に残るのみで記録、伝承されることなく数多くが消失している。

地名を歴史資料として記録し、研究に活用する手法は、服部英雄九州大学名誉教授の研究室が中心となり、全国各地で行ってきた。『二千人が七百の村で聞き取った二万の地名・しこ名』（花書院、2001 年）はその集大成と言える成果である。本調査研究は、服部氏の歴史地理学的な方法論を用い、服部氏の調査の主体となった大学生を住民に置き換えて実施する。地域の地理や暮らし、人脈に明るい住民が主体となることでより深い調査が可能になる。また、同じ人物が、何度も調査に参加することで、史料批判の方法や集落での複数への聞き取りによる証言のクロスチェックなど、証言の資料化に向けたノウハウの習熟も同時に行えると考えている。

本書が行う調査研究は、専門知識と膨大な時間費用を必要とし、従来研究者や郷土史家らが中心となって行ってきた地名や民俗の調査を、大学で調査手法を学び地域に帰郷した研究者が、住民と互いに学び合いながら実施する方法論に特色がある（図１）。また、住民が調査を行うことで、地名や地域資源など集落の歴史情報から地域資源の意味を理解し、地域おこしや地域維持のヒント・方策として活用する実践活動に発展させられる可能性がある。すなわち、刻一刻と消失しつつある「民衆知」を、住民のマンパワーによって広範囲にできるだけ数多く記録する手法である。

本書では、高知県西部の高岡郡四万十町・四万十市西土佐地域などを事例に、地域に住む研究者と住民が、地域の歴史を残し伝えていくという方法を提示する。その中で、地名や民俗の調べ方、記録の仕方を学んでもらえたら幸いである。　　（楠瀬）

図１　住民による地名調査の方法論



[1)] 大野晃 1991「山村の高齢化と限界集落」『経済』1991 年 7 月号、新日本出版社
楠瀬慶太 2009「限界集落化の歴史的プロセスに見る山村の未来」『政策経営研究』2009vol.1

２、本で学ぶ―地名の図書館

忘れ去られ、消えゆく膨大な地名を記録するには、それらを集積するデータボックスが必要である。そのため四万十町の住民団体「奥四万十山の暮らし調査団」の武内文治代表が、2015 年に立ち上げたのがインターネット上のホームページ「四万十町地名辞典」（https://www.shimanto-chimei.com/）である。

これまでの地名研究は、郷土史家と呼ばれる人たちが中心になって進めてきた。彼らが収集した資料、聞き取ったメモの中には、発表する機会もなくその人とともに灰となっていくものもある。これらを「もったいない。拾い集めよう」という発想から、地名の記録調査の「図書館」「辞書」的存在として始めたのが「四万十町地名辞典」である。編集子・武内氏が 100 歳まで生きる 40 年間、四万十町を歩き掻き暑める史資料の「バケツ」がホームページである。「四万十町地名辞典」は進化する辞典、伊能忠敬の「一身ニシテ二生ヲ経ス」をまねして地名学徒となり４年。素人が「地名を楽しむ人」のためにオススメする「バイブル」でもある。

以下、「四万十町地名辞典」に集成している地名研究に関する基礎文献を紹介していく。

（１）辞書　　おすすめ順。☆は必携図書

☆**民俗地名語彙辞典－民俗と地名－・上下巻**　永井美吉（三一書房、松本健一責任編集、1994 年）

座右の書。「引く辞書」と「読む辞書」があるがこの二つを兼ね備えているのがこの辞書。語彙を調べていたら隣の項も読みたくなる。全国の地名研究者の同人誌や週刊誌まで引用し出典明示している。

☆**地名用語語源辞典**　楠原佑介・溝手理太郎（東京堂出版、1983 年）

日本語の地名用語のあらかたを方言語彙、専門用語などを含め諸説を網羅。地名を「過去の遺物（文化財）」でなく「生活用語」としてとらえ、権威者の旧説や無理な他言語の解釈を戒めた方針で収録。最初に「引く辞書」。

☆**高知県方言辞典**　土居重俊・浜田数義（高知市文化振興事業団、1985 年）

方言はことばの母。「いちきちもんちきち」と聞けば宿毛の人だなとわかる。高知県下全域にわたる方言語彙を収集し、用例語法とともに使用地域を明示し、困難なアクセントも記号で表示。必ず引く辞書。

☆**綜合日本民俗語彙・全五巻**　民俗学研究所（平凡社、1955 年）

全国の山村海村を調査して採訪した民俗語。地名は暮らしを刻んだ言葉、忘れかけた生活用語があぶり出しのように見えてくる。重すぎて 4 番手。

☆**角川日本地名大辞典・39 高知県**　山本大ほか（角川書店、1986 年、全 49 巻）

地名編は五十音に項をたて同じ見出しも中世・近世・近現代と歴史的に配列。地誌編は各自治体単位で編集。小字一覧等の資料も充実。

地名関係文献解題事典　鏡味明克・楠原佑介・桜井澄夫（同朋舎出版、1981 年）

歴史学、地理学、国語学、民俗学など各分野の地名関係文献資料を収集した目録で書籍内容の「見える化」。昭和 53 年以降は未掲載で続本を期待。

分類山村語彙　柳田国男・倉田一郎（国書刊行会、1941 年）

山村の地形地名をはじめ山仕事、狩猟、山の信仰などの項目に分けて生活語彙を全国収集。「柳田国男」と権威で引用。金属地名・焼畑の項はない。

詳説日本史図録　第 6 版（山川出版社、2015 年）

「歴史の山川」が写真や図絵をふんだんに使って年代順にテーマを設け収録した図録。読んで面白いし時代を俯瞰できる。得意の年表もある。

大日本地名辞書・全 8 巻　吉田東吾（冨山房、1907 年）

古書ではあるが、在野の歴史地理学者が 13 年かけた古今未曽有の大地誌。大地名中心で権威としては欲しいが重い。今は角川日本地名大辞典か平凡社か。

日本山名辞典　徳久球雄・石井光造・武内正（三省堂、2011 年）

25,000 分の 1 地形図の山・峠を 5,100 項目収録。唯一の山名辞典で別称・標高・所在・概要・地形図名・十進座標の基本データを記述。付録も充実。

日本全河川ルーツ大辞典　池田末則・村石利夫（竹書房、1979 年）

全国の河川の「川名のルーツ」をコンパクトに収録。高知県 181 河川は徳弘勝氏が川名解説している。四万十町 7 河川で長沢川、久保川、中津川、日野地川など未掲載。

地名アイヌ語小辞典　地里真志保（北海道出版企画センター、1956 年）

地名は日本語で解釈するのが原則。ただし日本語ルーツなど言語学者のふがいなさにアイヌ語・縄文語・古朝鮮語で解明を実践するのが在野研究家。

※上記以外の辞書一覧

「地名語源辞典」山中襄太(1968 年/校倉書房)、「日本地名語源辞典」吉田茂樹（1981 年/新人物往来社)、「古代地名語源辞典」楠原佑介ほか（1981 年/東京堂出版)、「地名の語源」鏡味完二・明克著(1977 年/角川書店)、「地名伝承論・大和古代地名辞典」池田末則著(1990 年/名著出版)、「苗字と地名の由来辞典」丹羽基二著（2006 年/新人物往来社)、「あぶない地名－災害地名ハンドブック」小川豊著（2012 年/三一書房）ほか

（2）地名を学ぶ　おすすめ順。☆は必読書籍

☆**地名の研究**　柳田国男　（古今書院、1937 年）

国立国会図書館デジタルコレクションで読めるほどの「古典」。日本民俗学の開拓者。全国の山村・海村を調査し民俗学の理論・方法論を提唱した。地名研究の原点であり、その後の地名研究者は大きな影響を受ける。

☆**地名と風土**　谷川健一編　（小学館、1981 年）

地名を愛し地名を守ろうと全国から 667 人結集したシンポジウム報告書。「地名と風土」は谷川健一氏が創刊（1984）した情報誌の名称でもある。2015 年に復刊。1981 年の地名熱気、谷川氏の地名愛情が伝わる書。

☆**地名の歴史学**　服部英雄　（角川書店、2000 年）

「地名は村の過去への入口」という。古老に地域の地名を聞くことから調査作業が始まり文献資料とつきあわせ、地名から地域の歴史と景観の復元を試みる。地名を歴史学の材料としてアプローチし群・面で把握する手法。

☆**牛のきた道**－地名が語る和牛の足跡　本間雅彦　（未来社、1994 年）

柳田門下生。宮本常一氏と親交のある佐渡在住の地名研究家。全国各地の小字「牛」地名を採取しまとめたのが本書。牛の古語「ビヤ」の付くビヤクビが高知に多いと指摘。地名研究の面白さを学ぶきっかけとなった本。

地名を考える　山口恵一郎　（ＮＨＫブックス、1977 年）

総合的な地名の情報書。地名を「人間生活の痕跡」ととらえ、地名の変遷を「地名群落」として面的に理解する。蹉跎岬（さだ）が足摺崎（あしずりざき）になり足摺岬（あしずりみさき）となる。地名は時代の表現者だ。

☆**新・地名の研究**　千葉徳爾　（古今書院、1983 年）

「地名の資料的価値を十分に利用していない」と述べ地形図に地名分布表示を提唱。民俗学と地理学にまたがった地名考察の手引きとなる入門的解説書。千葉氏は狩猟など山村文化研究の第一人者で「狩猟伝承」は有名。

☆**地名のはなし**　都丸十九一　（煥乎堂、1987 年）

柳田氏から「カイト地名の研究を」と命を受けるほどの柳田門下生。教員を勤めながら群馬の地名に一生を捧げた在野の地名研究家。地名の共通要素を抽出してまとめる手法など地名の学び方がわかる入門書。続もある。

☆**風呂と日本人**　筒井功　（文春新書、2008 年）

高知出身の筒井氏が全国をめぐる民俗調査と取材で発表した多数の書籍のひとつ。世界一、風呂好きの日本人だが中世以前は石風呂（蒸し風呂）。全国の風呂地名を調査し、歩いた先に四万十町戸川の「一ツ風呂」もある。

日本の地名散歩・アイヌ語古朝鮮語　大友幸男（三一書房、1997 年）

元岩手日報の記者。冒頭に「四国にもあるアイヌ語地名」「土佐や足摺岬も」の章立てでは読まない訳にはいかない。四万十川もアイヌ語「シマム・トー」は「西の・大川」と。ふがいない言語学者へ在野の挑戦だ。

日本超古代地名解　古川純一　（彩流社、2004 年）

地名の謎解きは面白い。語呂合わせや他言語解釈も問題がある。ただ、日本語は周囲の諸言語から孤立した存在である。一流クライマーの古川氏が一音語地名から古代日本の原像を読み解く挑戦作。縄文的生き方は旬だ。

1990 年代以降に九州大学の服部英雄氏（日本中世史）の研究室が行ってきた地名調査・研究の手法も参考になる。地名を歴史資料として記録し、現地を歩くことで前近代の村落研究に活用する手法は、服部英雄 1994「地名史（資）料論」『中世資料論の現在と課題』（名著出版）、同 1994「地名と歴史学－歴史地図の読解」『岩波講座日本通史』別巻 3、同 1994「地名と水利」『中世荘園の世界』（思文閣出版）、同 1995『景観にさぐる中世』（新人物往来社）などで理論化されている。一般書では、同 2000『地名の歴史学』（角川書店）、同 2007『峠の歴史学』（朝日選書）が読みやすい。

また、調査報告書としては、服部英雄編 2001『二千人が七百の村で聞き取った二万の地名・しこ名』をはじめ、服部英雄氏の研究室が発刊した『地域資料叢書 8　中世景観の復原と民衆像－史料としての地名論』など「地域資料叢書」のシリーズがある。岡山県の大田荘故地を調査した前原茂雄 1993『地域資料叢書 2 備後国大田庄故地調査報告書』や長崎県対馬の集落を調査した本田佳奈 2004『地域資料叢書 7　対馬トポフィリア』、佐賀県水田荘故地を調査した貴田潔編 2012『地域資料叢書 11 筑後国水田荘故地調査報告書・史料編』などがあり、地名の記録調査の方法が分かる。高知県関係では、香美市大忍荘故地を調査した楠瀬慶太 2008『新韮生・槇山風土記』がある。

（３）高知県の地名を調べる

地名には時間軸がない。すなわち、地名を見るだけでは、いつから使われ、どのような意味を持つのかは十分には分からない。また、辞書で調べた同じ語句の地名でも、その意味は地域によって違っている場合もある。その際に活用できるのが、地名が書かれた中世の古文書や、江戸時代の地誌などの歴史資料で

あり、地域の地名について調べた研究書である。

【歴史資料】おすすめ順。☆は必読書籍

☆長宗我部地検帳（ちょうそがべちけんちょう）

長宗我部元親が豊臣秀吉の命により、天正 15（1587）年から同 18（1590）年に土佐国内で行われた土地調査（検地）の台帳。全 368 冊で、国重要文化財（高知城歴史博物館所蔵）。慶長 2（1597）年の仕直し検地の結果や、山内家入国後の慶長 16（1611）年の土佐郡本川郷検地町なども含まれる。江戸期には山内氏に引き継がれ、土地政策の基礎台帳となった。県内全域を網羅し、ホノギ（地名）、田等から現在と当時を比較できる土佐の地名研究の「バイブル」。全 19 冊が高知県立図書館から翻刻されて出版されているが、誤読も多い。土佐山内家宝物資料館が、2010 年にＢ４版の全 272 冊の『地検帳』原本の写真帳を作っており、県立高知城歴史博物館で閲覧して確認することをおすすめする。

☆南路志（なんろし）

高知城下の豪商美濃屋、すなわち武藤致和と平道父子が２代にわたって全力をあげ、土佐の歴史・地理・民俗・宗教・文学などに関するさまざまな資料を 120 巻にまとめ、文化 10（1813）年に完成した一大叢書である。江戸時代大藩の地誌「紀伊続風土記」「芸藩通志」を凌ぐ大史料集。後述の「土佐州郡志」より神社やなどの記述が刊本は高知県文教教会が洋装本上下 2 冊を出版（1859～1960）、高知県立図書館から全 10 巻が出版（1990～1997）されている。県立図書館本２巻の「開国の部」には、村の地高や古城、名勝旧跡、寺社の祭礼日や本尊、棟札などの記述があり、集落の祭礼や宗教の情報に詳しい。特に、寺社は所在地の地名が書かれており、現代と比較検討ができる。

☆土佐州郡志（とさしゅうぐんし）

18 紀前半（1707～1722 年の間）の成立。土佐藩山内家の儒臣緒方宗哲により作られたものとされる近世土佐国の地誌である。土佐藩中期の村別に調査してまとめた全 27 冊の地誌。村の四至、山川、寺社、特産物など記載しており、集落の状況を知ることができる。原本は県立高知城土佐山内家宝物資料館所蔵。『南路志』と比較すると 100 年さかのぼるため、村の変遷、寺社の盛衰などが確認できる。刊本は、土佐史談会から全 2 冊が復刻出版されている。

☆皆山集（かいざんしゅう）

山内家元藩士で高知県庁の地誌編纂係を勤めた松野尾章行（まつのおあきつら）が土佐藩史編纂のため集めた史料を書写した書物。歴史・宗教・経済・文芸など幅広く網羅し、和装本で全 116 巻。 原本は高知県立図書館にある。2006 年放送のＮＨＫ大河ドラマ『功名が辻』の映像撮影のため同館が貸し出した１冊が紛失した。 刊本は、高知県立図書館から全 10 冊が出版（1973-1978） されている。

☆寛保郷帳（かんぽうごうちょう）

「御国七郡郷村牒（おくにななぐんごうそんちょう）」。 寛保３（1743）年土佐絵図作成に当って編纂されたもので、原本は七郡（1,076 村） 7 冊のほか附録１冊計８冊よりなる。通称、寛保郷帳と呼ばれる当時の土佐の地高と人口その他を集計した国勢調査。村ごとの戸数・人口・男女比・牛馬数・猟銃数などから江戸中期の村の状況が確認できる。

土佐国群書類従（とさのくにぐんしょるいじゅう）

編者は土佐の吉村春峰で、明治 14（1881）年に成立したもの。江戸時代を中心として中世末

から明治初年までの土佐（高知）の各種の著書・史料を収録した大叢書。刊本は、高知県立図書館が全 13 冊を出版（1998-2011）している。

土佐国群書類従拾遺（とさのくにぐんしょるいじゅうしゅうい）

土佐国群書類従に収められていない、土佐の近世を中心とした歴史、地理、民俗、文学、宗教、芸能などの諸史料全 70 巻 113 冊が 13 部門に大別されている。この稿本は昭和 20 年高知市空襲で焼失したことから、国立公文書館内閣文庫架蔵の写本を底本として全 7 巻の計画で翻刻出版を進めている。

☆高知県神社明細帳（こうちけんじんじゃめいさいちょう）

明治 12（1779）年に内務省の布達により高知県が調査し、まとめた県下の神社の総目録。 神社の名称、鎮座地、社格、祭神、由緒、例祭日、建物や境内の規模、合殿神社、境内神社、信徒数などが記録され、それ以降、大正・昭和期を通じて追記や修正が加えられている。由緒には勧請の経過のほか、棟札の内容、土佐州郡志や南路志などの文献の引用、津波等の災害記録も記録されており、歴史を学術的に研究するための貴重な資料。高知県立図書館が所蔵して、安芸郡 6 冊、香美郡 8 冊、長岡郡 9 冊、土佐郡 7 冊、高知市 1 冊、吾川郡 6 冊、高岡郡 14 冊、幡多郡 12 冊の簿冊でデジタル化もされ、申請により閲覧も可能。

※上記以外の歴史資料一覧

【地誌】「土佐幽考」(1734/享保 19 年/安養寺禾麿著／郡郷・山川・名所など土佐国地誌)／「白湾往来」（皆山集に収録された地誌）／「土陽淵岳誌（どようえんがくし)」（1746 延享 3 年/植木挙因著／3 巻 399 項目の土佐博物誌）

【紀行文】「西部巡見日記」(1788/天明 8 年/森勘左衛門芳材著/天明飢饉後の領内民情調査)／「西郷浦山分廻見日記」（1801/享和元年/下横目三八著/当時の領内民情調査の記録)/「土佐一覧記」（川村与惣太著 1775/写本「図書館本」「広谷本」）／「四国遍礼霊場記」（1689/元禄 2 年/寂本著）／「四国遍路道中雑誌　三巻」（1844/弘化元年/松浦武四郎著）／「測量日記」（伊能忠敬）／「伊能測量隊員旅中日記」（柴山伝左衛門）／「奥宮測量日記」（奥宮弁蔵）

【研究書】

地名の読み方に関しては、「高知県地名辞典―地名の読みかたー」（ＲＫＣ高知放送・高知新聞社/2007 年）が参考になる。地名の由来は、「土佐の地名」（徳弘勝著 /1976 年/土佐史談会)や「西南の地名」（岡村憲治著/1981 年)などが基礎文献。高知新聞・片岡雅文記者が 2003 年から現在まで書き続けている企画記事「土佐地名往来」（高知新聞夕刊・毎週月曜日）には、地名の由来に関する諸説が整理されていて分かりやすい。「四万十町地名辞典」の HP でも内容を整理して紹介している。

山や古道の地名については、「土佐の峠風土記」（山崎清憲著/1991 年/高知新聞社)、「土佐の道」（山崎清憲著/1998 年/高知新聞社)、海の地名については「高知の海釣りのすべて−高知・南予の海釣り空撮 228 ポイント」（高知県磯釣連盟/高知新聞社/1999）も参考になる。県内の神社については、「鎮守の森は今」（竹内荘市著/2009 年）　と「鎮守の森は今　追補版」（竹内荘市著/2009 年）が主要神社を網羅しており必読書となっている。

※上記以外の研究書一覧

【宗教】「高知県神社誌」（竹崎五郎著/1931 年）／「長宗我部地検帳の神々」（廣江清著/1972 年/土佐民俗学会／「土佐神道考古学」岡本健児著（/高知県神社庁/1987 年）

【歴史・地理】「長宗我部地検帳の研究」（横川末吉著/1961 年/高知市民図書館）／「ふたつの浮津から」（徳弘勝著/1978 年/土佐史談会）／「ふるさとぱとろーる」（1980～1983 年/高知新聞朝刊毎週火曜）／「横川

末吉遺稿集　地方史を歩くー土佐」（1982 年/土佐史談会）／「土佐の地名メモ」（徳弘勝著/1984 年/高知印刷）／「校注土佐一覧記」（山本武雄著/1986 年/室戸市教育委員会）／「地検帳が語る幡多の歴史」（上岡正五郎著/1981 年）／「高知県集落台帳」（高知県企画調整課編/1975 年）／「伊能測量隊土佐をゆく」（山本文雄著/2007 年/土佐史談会）／「ヘンロ道　高知県歴史の道調査報告書第二集」（2010 年/高知県教委）

（４）四万十の地名を調べる

郷土の先人が日常の暮らしを綴った書籍。そのなかに潜む地名は日用雑貨の用の美を醸しだしている。その書籍よりもっと日常会話で聞く地名は、「漢字」でなく「音声」なので、音素やモーラやアクセントからより深い情報を得ることになる。子どもの頃、小渓流は「△タネ」と思っていたら「△谷」という漢字だと学校で教えられたし、親戚の住む西土佐の「ゴンダネ」は「権谷（ごんだに）」であることを知った。また会話に出てくる地名は中世以前の歴史を読み解くヒントにもなる。地域の地名を学ぶ「調べ、歩いて、見て、聞いて」の第 1 段階での文献調査は重要なステップであるが、地名を落穂ひろいのように探しあてるのは、「現地踏査」しかない。話から見つけた地名は時代を越えた昔の景観まで感じることができる。

【埋蔵文化財報告書等】

埋蔵文化財の保護と開発事業との調整を図るため発掘調査が実施され各種の調査成果の報告書がまとめられている。縄文の暮らしが刻まれた文字としての「地名」はないが、高度な植物利用と狩猟の「空間」を修復することはできる。報告書には、発掘前（圃場整備以前）の地形形状が詳細に図面化され公称地名だけでなく通称地名も広く拾われており有用な資料となる。すべての報告書に記載される地名を時間軸と空間軸で「縄文の見える化」を進めたい。なお、報告書は高知県立図書館で閲覧可能だが、その一部は奈良文化財研究所・「全国遺跡報告総覧」のホームページで入手できる（四万十町では４件の報告書がある）。

埋蔵文化財の総合理解には「四万十川流域の縄文文化研究」（木村剛朗著/1987 年/幡多埋文研）がお勧めで、埋蔵地ごとの報告書は「窪川町埋蔵文化財発掘調査報告書第 1 集」（2004 年/窪川町教育委員会）、「木屋ヶ内遺跡跡」（前田光男著/1995 年/正町教育委員会）、「十川駄場崎遺跡発掘調査報告書」（山本哲也著/1988 年/十和村教育委員会）など多数。埋蔵文化財には「窪川町埋蔵文化財包蔵地調査カード」山下英雄・寺川嗣編（高知県教育委員会）、「大正町埋蔵文化財包蔵地カード」（大正町教育委員会）など包蔵地ごとの調査カードがあるので教育委員会へ照会したら閲覧可能だ。

【郷土資料】

高知市民図書館の前庭に「市民の図書館」の碑がある。図書館はだれもが利用できるので館を担うのはあなたですよと主体者としての市民に呼びかけた「の」であったのではないか。オーテピアというネーミングは今風であろうが「の」の意識は継続していただきたい。

郷土資料の収集は「町民の図書館」の使命の一つであるが、レファレンスサービスを求めるにはあまりにも脆弱な図書館費で、郷土資料の収集にも手立てができない現状である。

図書館は「知る自由を保障する機関」であり民主主義を培う装置でもある。図書館利用者も無料で本を貸してくれる場所だけでなく装置としての図書館活動を支援していく必要もある。郷土資料の収集は一次的には図書館の使命ではあるが、納本制度のような仕組みで広く町民に呼びかけ、収集した書籍等は図書館利用者と共同でレファレンスデータベース を構築し、書籍と情報が一体となった「情報の公共財」としていただきたい。

郷土の人が紡いできた書籍は、その地域で日常的に使われていた地名（通称地名）が多く刻まれている。また、郷土史を含めた土佐史談会などへの寄稿文も文献資料として大切な役割がある。近代以降の「地名関連」の一部を旧町村に分けて紹介する。

窪川　地名とその沿革や関連地誌を理解するためにはそれぞれの自治体史を最初に読まなければならない。その前に甲把瑞益の「仁井田郷談」は第一級の地名資料であるので最初に読んでいただきたい。

最新の町史は「窪川町史」(窪川町史編集委員会編/2005 年)である。合併前のあわただしい編集であったのか誤植や数値の誤りがあるのでネットで正誤表を公表し最新性を保つ必要がある。昭和の合併前の自治体史として「窪川町史」(窪川町史編集委員会編/1970 年)、「仁井田村史」、「東又村誌」、「興津村誌」がある。「広報くぼかわ」も重要な資料となる。

窪川は「窪川史談会」「古文書を読む会」「土佐宮沢賢治の会」などの文化活動が盛んでそれぞれの団体が発行する「史談くぼかわ第 1 号〜第 9 号」や「あさぎり」「群青」「大地」「光原」「雑木林」「むらざと」「窪川こども風土記」など地域に根ざす文化活動の記録がある。辻重憲氏が寄稿した史談くぼかわ第 4 号「窪川の地名研究」・第 5 号「窪川町の地名の変遷と村名の由来」は必読である。氏は「土佐史談・各号」に地誌地名の研究を発表し「窪川夜話」、「窪川事物誌」、「郷土の郷士」などの書籍を表している。佐々木馬吉氏の「天正の窪川」(1983 年)、「天正の窪川Ⅱ」(1983 年)、「窪川の神々」、「窪川のみほとけ」は長宗我部地検帳による中世・近世の仁井田郷を学ぶうえで欠かせない書籍である。

また地域ごとに書かれた書籍はなお面白い。「明けゆく日野地」(田井集著/1982 年)、「霧の流れる里　窪川町・床鍋」(庄崎一著/1998 年)、「志和二千年・志和郷七ヶ村史」(佐々木泰清著・志和活性化協議会/2013 平成 25 年) など多数。現役の林一将氏は、個人で郷土資料館「古渓城」を開設し膨大な史資料を保存活用しているほか研究成果を「土佐史談」に寄稿し各種書籍も発行している。「窪川の歴史を探る会」を主宰し後継者の育成にも力を注いでいる。

大正　旧大正町には二つの自治体史がある。一つは伊与木定氏が中心になって編纂した「大正町誌」(伊与木定編/1970 昭和 45 年)、もう一つが合併前に新たに編纂した「大正町史 通史編・資料編」 (町史編集会議/2006 平成 18 年)である。大正町史の編纂方針は、前の町誌を含め、編纂した史資料を整理・分類して誰もが利用可能にしているところだ。南米移住の資料は多くの研究者が訪れている。伊与木氏は「土佐民俗」に研究成果を多く寄稿しており、山と川の暮らしの民俗調査で収集した民具等は四万十町郷土資料館に展示している。高知営林局の支援により出版した「下津井お留山記　上・下」(伊与木定著/1974 年/高知営林局)は古文書を現代文に書き下し、江戸期土佐藩の御留山の管理と利用 (仕成) が契約書の中に読み取れ、山の地名が随所に出てくる資料である。また、「上山郷のいろいろ掻き暑めの記 上・下」 (伊与木定著/1984 年)も上山郷の民俗がよく理解できるし掲載地名も多い。

「大正のむかし話」 (多賀一造編/1989 年)は大正地域の民話を集めたもので通称地名が散見される資料となる。個人出版の書籍では「檮原川の岸辺にて」(武内景明著/2001 年年)、「里に生き里に死す　武政秀美遺稿集」(2003 年)、「歩」武内一著などがあり、「農家民宿はこばの四季―大正中津川のくらし」(山﨑眞弓編/2014 年/南の風社) は大正中津川地区の暮らしが手に取るようにわかる。

十和　1984 年に出版された「十和村史」十和村史編纂委員会(1984 年)は、先に出版された山峡常民の生活をまとめた「十和の民俗 上」(十和村教育委員会編/1974 年)、「十和の民俗 下」(十和村教育委員会編/1977 年)の高い評価をうけて、吉村淑甫氏を中心として県下一級の研究者が部門別に担当して執筆されたもので、前段は研究紀要的な内容にもなっているが、北幡の林業史を学ぶときに十和村史を活用するなど自治体史をこえた役割を果たしている。「十和村史料」(1 号〜323 号・号外) があると記録されている。村議会議事録も町の文化財に指定されている。「広報十和村」もある。

地名研究では「ふる里の地名」 (十和村教育委員会編/1982 年)がある。すべての地区ではないが字それぞれを解説している。高知県の地名研究家・徳弘勝氏も特別寄稿して各地の地名を紹介している。

「十和村神社棟札全集」(十和村教育委員会/1980 年)、「とおわの民話」 (とおわの民話編集委員会編/2002 年)も参考になる。

十和出身の竹内荘市氏の「十和千祭　古里お祭り訪問記」(2005 年) はふるさとの祭りを 7 年間訪問した記録集。県下の神社をまとめた「鎮守の森は今」とともに現地踏査を重ねた成果。「わが里・人・土・そし

て詩」（谷本好美著/2000 年)、「閑人調」（谷本好美著/2005 年)、「複合経営に生きる」岡峯藤太著もある。

（５）ＷＥＢサイト・データベースで調べる

高知県立図書館で高知新聞データベースを無料で閲覧することができる。調査したい地名（大字名称が中心）で検索したら必要な記事を探すことができる。コピーサービスも１枚Ａ３で１０円である。また、公共データではないが全国の地名研究団体の研究成果をホームページで公開しているので紹介する。

▼「日本地名研究所」< http://chimei.people.co.jp/>　谷川健一さんが初代所長の研究所。「大地に刻まれた地名の声を聞く」がモットー。高知県の「地名研究会」はないので是非結成したい。

▼「地理院地図（電子国土Ｗｅｂ）」< http://maps.gsi.go.jp/#12/33.220739/133.023148 >　地図はやっぱり国土地理院。地形図地名は全て検索でき分布に強み。うえのＵＲＬで四万十町のまん中に遷移する。

▼基準点成果等閲覧サービス」< http://sokuseikagis1.gsi.go.jp/>　三角点を探すならこのサイト。調査記録の「点の記」もある

▼「市区町村変遷情報」< http://uub.jp/upd/>　明治の合併以降の市町村合併情報が網羅。トップページの「データと雑学で学ぶ都道府県市区町村」も「地名コレクション」など恐るべきデータ量で面白い。

▼「高知県防災マップ」< http://bousaimap.pref.kochi.lg.jp/kochi/top/select.asp?dtp=14 : >　高知県内のハザードマップ。渓流の名前はあるが、マップで位置はわかるが地元の呼び名と違う

▼「ネットの電話帳」<https://jpon.xyz/>　運営者がプライバシー権侵害で提訴された微妙なサイト。電話帳に掲載される住所・氏名・電話番号から検索可能。地名と姓は相関関係があり姓の分布で利用

▼「地名研究会」　全国の地名研究グループなど。過去の研究テーマもしっかり掲載している。研究会の名称で検索すればサイトが閲覧。「アイヌ語地名と古地図研究者の連携」「秋田地名研究会」「長野県地名研究所」「京都地名研究会」「くるめ地名研究会」「日本列島地名をゆく・日本歴史地名ジャーナル」他

▼「国立国会図書館デジタルコレクション・東京大学史料編纂所公開用データベース」など　史資料検索

（武内・楠瀬）

＝＝＝

コラム１　『長宗我部地検帳』とは[2)]

一国規模で残る太閤検地の地検帳としては全国唯一で、中近世の村落や戦国大名の在地支配を探る歴史資料として注目されてきた。『地検帳』の分析の仕方はさまざまで、近著では平井上総 2008『長宗我部氏の検地と権力構造』(校倉書房)のように大名検地のあり方に迫る研究や、朝倉慶景氏の「長宗我部地検帳にみる職種の人」『土佐史談』264～267 号のような『地検帳』に登場する職人に注目した研究、目良裕昭 2005「中世後期土佐国安芸郡の集落と地域社会」『四国中世史研究』13 号、2010「戦国末～豊臣期土佐国における城下町の形成と展開」『中世土佐の世界と一条氏』（高志書院）など『地検帳』の給人層に注目した歴史地理学的研究もある。傾向としては『地検帳』にマクロに迫り、構造的に当時の社会を理解しようという研究へと進んでいる印象がある。

一方、地名研究として『地検帳』を使用する場合はミクロな視点が必要である。後述するように、忍耐強い聞き取りによる『地検帳』記載地名の現地比定と、地形や地図の読み取りが求められる。その結果、地名に空間や地形などの情報が加わることにより様々な属性が加わり、詳細な中近世の村の姿が見えてくるのである。ここでは『地検帳』の性格について簡単に説明したい。

『地検帳』の構成　『地検帳』は、天正 15～18 年を中心に長宗我部氏によって作成された土地調査台帳で

---

2) 横川末吉 1961『長宗我部地検帳の研究』を参照した。

ある[3]。刊本は、高知県立図書館から全19冊が出版されている。この内、本書の分析対象地域となるのは、西土佐地域の『長宗我部地検帳幡多郡上の１』下山郷地検帳、窪川地域の『長宗我部地検帳高岡郡下の２』仁井田之郷地検帳（天正16年）、 大正地域の『長宗我部地検帳幡多郡上の１』の上山郷地検帳（慶長２年）、十和地域の『長宗我部地検帳　幡多郡上の１』の上山郷地検帳（慶長２年）である。

主としてホノギと字名との関係、寺社名の変遷で引用した。また、天正期の検地以前に長宗我部氏は「古帳」と呼ばれる帳簿を持っていた可能性があることも指摘されている[4]。『地検帳』の各筆にはしばしば「出何代」といった打出しが記載され、検地前の田地についても地高が定められており、天正検地以前の何らかの帳簿があったことは間違いない。この「古帳」（配分帳・給帳）について、横川氏は「長宗我部氏より出された知行状・坪付状と同一内容を持つものであったはずである」とし、これらは長宗我部氏によってそれ以前に土佐全域で総検地が行われた結果作成されたものではないとしている[5]。

『地検帳』の性格　天正検地は、太閤の命令による太閤検地であるが、長宗我部氏が主宰した指出検地で、「太閤検地の一環でありながら戦国的大名検地」であるとされる。天正検地の太閤検地との共通点は、六尺三寸竿（杖）[6]・三百歩＝一反の採用[7]、貫高・地高制から地高制への統一[8]であり、これらは太閤秀吉の指示により徹底されていたとされる。一方、天正検地の太閤検地との相違点は、地積の単位「代」の採用[9]、打出の採用・指出検地[10]、検地役人の内部派遣[11]、石盛の欠如[12]であり、これら土佐の在地の実情に応じた検地は、太閤秀吉が土佐における長宗我部政権の伝統を尊重した結果と評価される。このように、土佐の統一から10年以上経過した後の長宗我部氏の天正検地では、検地前に臣従した旧戦国武士層が長宗我部氏によって秩序的に格付けされており、検地による徹底した兵農分離が強行されたとは言えない。

『地検帳』の記載　『地検帳』では、江戸期の村の原型となる村ごとの検地が行われ、末尾に村高を記載するという方法が採られている。まず、検地地のホノギ（地名）[13]が書かれ、その横に「一所～反～代～

---

[3]『地検帳』の中には、名寄帳、・所務帳・庄屋差出といった正確な意味では地検帳とは言えない帳簿類も存在する。また、その作成年代も天正・文禄・慶長、作成年次の無いものが存在し、複雑な構成を持っている。

[4] 井上和夫 1952「長宗我部氏の天正地検帳の原本について」『法制史研究』2。『地検帳』の「配分古帳」「給帳」といった注記が、この「古帳」にあたると考えられる。

[5] 横川末吉 1961『長宗我部地検帳の研究』市民叢書15、高知市民図書館

[6] 天正十五年十月四日の「安芸郡安田庄地検帳」には、「□（こ）れより六尺三寸杖」とあり、六尺竿がそれ以前から使用されていた。しかし、後の百箇条の掟書に「一尺杖之事、城普請其外何によらす、本間六尺三寸たるへき事、附田地者、可為各別事」とあり、六尺三寸杖が以後徹底されたことが分かる。

[7] 天正十五年十一月の「長岡郡池村地検帳」「長岡郡十市郷地検帳」の二帳に、「杖ハ六尺三寸ノ杖也　右定一段ト云ハ横五分　長六十分　合三百分　五十代一反也」「右定壱反ト云ハ　六尺三寸ノ杖ヲ以テ　横五分　長六十分　合三百分　五十代一反也」の記載があり、三百歩＝一段の法則の採用が確認できる。

[8] 土佐国において、天正検地以前の段階では、貫高と地高が地域ごとに併存していたとされる。

[9] 天正検地では、三百歩＝一段の原則に従いながらも、全国的にも例のない「代」＝六歩を採用している。土佐国の中世史料でも、「代」が慣用化されて使用されており、天正検地での「代」の使用は、その独自性を示すものとして評価される。

[10]『地検帳』では、すでに認められた検地前の田地高と、検地により増加した田地高（出分）が別々に明示されている。このような地高の検地前後の相違への慎重な扱いや、検地後坪付として新知行給与が認められる事例が見られることから、天正検地は指出検地的な要素が強いことを示しているとされる。反面、打出の「出分」に関しては検地役人によってある程度徹底した検地が行われたものと考えられる。

[11] 各『地検帳』の末尾に記載された検地役人の多くは長宗我部氏の有力家臣で、内部の人間が派遣され、隣国伊予国の天正検地のように太閤秀吉から検地役人（浅野長政）が派遣されるということはない。

[12]『地検帳』には、地高が記載されるのみで、分米＝石盛の記載は欠如している。そのため、「上・中・下・下々」という田畑屋敷の等級と等級別地高が石盛の役割を果たしていたと考えられている。また、田畑屋敷の等級把握は天正検地以前から行われ、太閤検地の影響によるものではないとされる。

[13] ホノギ（地名）を中心に、「～ノ上」「～ノ下」「～ノ西」のように方角で検地地を示す場合が多い。

歩」と地高[14]が記載される。その下に、出分[15]・地目[16]・等級[17]・面積の内訳が記載される。その下には、その土地の給人または給分が記載され、その右横または左横に扣者・作人・居住者などが記載される。また、頭または末尾に、隣村との堺が記載される場合が多い。（楠瀬）

３、歩いて調べる―地名の歩き方[18]

地名は長期にわたって使用され続け、発音や音便、意味の変化が起きるため、その語源や意味の解釈は非常に難しいことが指摘されている[19]。その地名を語源の考証にとどまらず、「住民の生活史を明らかにする資料」として歴史研究の資料として捉えたのは柳田國男[20]である。特に、1980 年代以降には、言語人類学や認識人類学の影響を受けて、地名は村という共同体の地形や土地への環境利用・環境認識の在り方に強く影響を受けていることが指摘されるようになり、歴史地理学の研究者らが地名研究を積極的に行うようになった[21]。

つまり、地名は生業を通じた土地利用の結果生まれたものであり、その語彙や立地等を分析することで、村の暮らしや民俗などの生活史を復原する重要な歴史資料となりうるのである。ここでは、その研究方法について、高知県中東部の山間地域である香美市物部町の地名を事例に簡単に紹介する。

（1）　地名の収集

ここで用いるのは、地名に含まれる語彙・歴史・立地などの情報を抽出し、他の地名との関係から多角的に分析する方法である。すなわち、一つ一つの地名を見るだけでは分からないことを、多数の地名を統計的に分析することで、その地域の生業や土地利用などの特徴を地名から明らかにしようとするものである。この方法を用いるためには、地形や生業などが類似した地域で、分析に用いる大量の地名を収集する必要がある。

小字の利用　もっとも簡単に収集できるのは小字（こあざ）地名である。小字とは市区町村内の区画である字（あざ）のうち、大字を除くもので、一筆耕地が集合したものを指す。江戸時代からの「村」が明治時代の市町村合併によって大字（おおあざ）となり、これと旧来からの字を区別して「小字」と呼ぶようになった。小字には境界（字界）があり、上図のように字界を記した「小字図」や電子地図を市町村の役場が管理している。役場の建設課や税務課で、小字図の閲覧・コピーができる。また、高知県の小字一覧は、「奥四万十山の暮らし調査団」のホームページ「四万十町地名辞典」（https://www.shimanto-chimei.com/）でも一部データ（エクセル形式）を公開しているほか、『角川日本地名大辞典 39 高知県』（角川書店）巻末にある市町村別の小字一覧でも確認できる。

小字図を読む　四万十町里川の小字図を見ると、小字の領域も山部では非常に広いのに対し、人間が暮らす集落や田畑のある場所の小字は領域が狭く、入り組んでいる状況が確認できる。土地利用が頻繁な場所で地名の使用頻度が高く、土地を細かく分けて複数の地名を付けて使ったことが分かる。一方、土地利用

---

[14] 単位は、1 町＝10 反＝500 代＝3000 歩＝6000 勺である。
[15] 出分とは、検地によって新たに見つかった土地（「打出し」）のことである。
[16] 田、畠・山畠・切畠、屋敷・畠屋敷・山畠屋敷、荒、芝などがある。「田」は水田、「畠」は普通の平地部にある畑、「山畠」は山間部の畑（「切畠」を指している可能性もある）、「切畠」は焼畑、「屋敷」は屋敷のみが単独で存在する場合、「畠屋敷」は平地部で屋敷の周りに畑がある場合、「山畠屋敷」は山間部で屋敷の周りに畑がある場合、「荒」は耕作されていない土地、「芝」は草地のことか。
[17]「上・中・下・下々」の等級がある。
[18] 楠瀬慶太 2013「高知県旧物部村の地名に見る山の生活誌」『四国中世史研究』12 号、同「高知県の地名に見る災害と開発の記憶」『土佐民俗』96 号を基に整理した。
[19] 服部英雄編 2004『別冊歴史読本八一　地名を歩く』新人物往来社
[20] 柳田國男 1936『地名の研究』
[21] 浅野久枝 1984「東京都三宅島における地形を主とした民俗分類体系」『地理学評論』57
福田珠己 1989「四国山地旧焼畑村落における環境区分」『人文地理』41―4

が少ない山部では、広い区域に地名を付けて利用していたことがうかがえる。地名の範囲から、土地利用の歴史も見えてくる。

歴史資料の利用　古文書や地誌類、土地台帳など歴史資料から、中世や近世、近代に実際に使われた地名を収集する方法もある。これらは一部小字と重複しているが、小字には残っていない地名も多数存在しており、貴重なものである。文書の年代から地名が使われた上限が判明し、地名に時間軸（年代）を与えられる。さらに、聞き取り調査や現地踏査などで地名の位置を特定できれば、文書の解釈や地域の歴史解明にもつながる歴史資料となってくる。

聞き取りによる収集　歴史資料や小字にも載っていない地域の古老が知る小地名や通称地名を収集し、地図に記録することも重要である。過去には、谷や田畑、山の名前など小字以外の多数の小地名が使われて記憶されていたが、生業や生活形態の変化で地名が使われなくなり、忘れられているものも多数ある。

四万十町里川の小字図

（2）地名語彙の分析

まず、歴史地理学者の関戸明子氏らが用いている、大量かつ複雑な地名を語彙分類し、統計化・構造化することで地域の地名の特徴を明らかにする方法[22]を紹介する。小字、歴史資料、聞き取りによって約 4000 個の地名を収集[23]している物部町の地名分析を例に見ていく。

接尾辞の抽出　地名のほとんどは複数の語によって構成される複数語である。例えば、物部町に多く見られる「大谷」と言う地名は、前部の「大」という土地の性質・状態を表す形容語と、後部の「谷」という地形名で構成されている。特に、語構成の最後部の接尾辞は複数の地名に共通してみられ、下位の地名のカテゴリーの基準として重要な機能を果たし、地名の持つ意味を強く規定している。

接尾辞は、「ヤ」「ヤシキ」「タク」「ヂ」「ハタ」「タ」「バ」など人間によって人為的に作られた「社会的要素」を持つもの、「タニ」「サコ」などの地形を表す「自然的要素」を持つもの、「キタ」「ミナミ」などの方位、「シモ」「カミ」などの方向を表す「位置関係要素」を持つものの三つのカテゴリーに分類される。

地名語彙分類の概念図

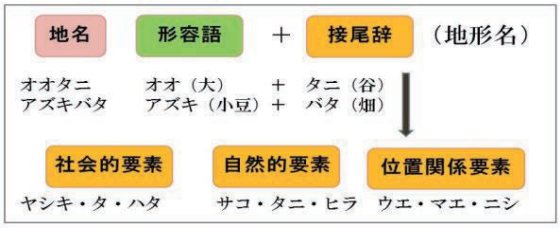


表 1　物部地名のカテゴリー分類

		接尾辞	屋号	地名
社会的要素		ヤ	130	190
		ヤシキ	52	131
		タク	11	12
		ツジ	0	1
		ジ	11	39
		ハタ(ケ)	1	16
		タ	5	39
		バ	9	29
		ドイ	21	38
		ミチ	2	5
		その他	79	79
		小計	321	579
自然的要素	地形	タニ	21	408
		サコ	5	127
		ハラ	0	5
		タイラ	5	30
		ヒラ	4	109
		ノ	11	40
		クボ	12	85
		ナロ	5	62
		エミ	4	9
		オカ	11	85
		ウネ	10	107
		ミネ	0	14
		ムネ	3	9
		ヤマ	2	177
		オ	5	29
		クラ	0	6
		イワ	2	25
		イシ	3	105
		イワヤ	0	8
		サカ	1	5
		モリ	3	24
		ヤブ	2	26
		カワ	2	11
		サワ	0	5
		イズミ	8	12
		トウ	0	24
		タオ(タワ)	0	4
		イケ	2	8
		タキ	3	42
		その他	3	3
		小計	127	1604

		接尾辞	屋号	地名
位置関係要素	方位	キタ	5	10
		ミナミ	6	13
		ヒガシ	18	21
		ニシ	37	42
	方向	カゲ	3	13
		ヒウラ	4	16
		キシ	0	6
		ウラ	5	23
		カミ(ウエ)	26	87
		シモ(シタ)	33	62
		ナカ	8	11
		ウシロ	17	33
		マエ	29	58
		ムカイ(ムキ)	16	40
		モト	43	99
		クチ	2	26
		サキ	4	15
		キワ	1	2
		ウチ	3	33
		トコ	7	26
		その他	2	2
		小計	269	638
未分類			70	
総計			787	

[22] 関戸明子 1988「地名研究の視点とその系譜」『歴史地理学』140。関戸明子 1989「村落の空間構成と地名からみた土地分類」『人文地理』41－2

[23] 楠瀬慶太 2008『新韮生・槇山風土記』花書院

接尾辞の分類　この分類を、旧物部村の地名に適応して分類したのが表１である。エクセルに地名を入力して、項目ごとに分類して数量を抽出する作業を繰り返して作成している。

縦方向に展開する物部町佐岡集落

これを見ると、その場所の地形をあらわす「自然的要素」を持つものが最も多く、「社会的要素」、「位置関係要素」を持つものは少ない。人間の居住空間の外の自然が土地のほとんどを占める山村において、土地の名前（地名）に「自然的要素」を持つ接尾辞がつけられるのは当然の結果であろう。３要素ごとに細かく見ていくと、山村の人々の土地利用の特徴が見えてくる。「社会的要素」では、人間の居住地を表す「ヤ」「ヤシキ」地名が多くを占める。「ドイ」は平安時代以降、各村々の土地開発に関わった土佐の名主層の屋敷「土居」を指す言葉で、１村に１軒ある程度である。「タ」（田）「ハタ」（畑）地名の少なさも、土地が少ない物部町の特徴を反映している。「自然的要素」では、「タニ」「サコ」「タキ」という谷地名が圧倒的に多く、「ヒラ」「オカ」「クボ」「ウネ」などが続く。急傾斜地に「谷」「畝」「平」が連続する物部町の地形の特徴が色濃く反映されている。「位置関係要素」では、「ウエ（カミ）」「シタ（シモ）」が多い。物部町の集落は、急傾斜に展開するため、垂直方向に屋敷が展開する傾向があり、それが地名に反映されている。

このように地名を分類することで、地名から地域の地形や集落の特徴を推測できる。また、地形や集落の特徴を説明する際にも、統計・構造化して説明する資料となりうる。

屋号との比較　地名の接尾辞を分類基準や地域を変えて比較すると、その地域の地名の特徴が見えてくる場合もある。

現在の仙頭集落

物部町では、社会的要素、位置関係要素を持つ接尾辞を含む地名も一定数存在するが、これは家屋敷の呼称である屋号（ヤジ名）との比較によってより明らかになる（表１）。

約 4000 の地名の中には約 800 の屋号が含まれている。屋号は現在ほとんど使用されていないが、地名全体の１／５を占める数が残存している状況を見ると、屋敷地が生活の中でかなり意識して利用されてきた地名であることがうかがえる。

３要素ごとの数量を見ると、前項の地名全体の分類と異なり、屋号では「社会的要素」「位置関係要素」を持つものが圧倒的に多く、「自然的要素」を持つものが少ないのが分かる。自然的要素が大多数を占める地名の傾向とは様相が異なっている。

要素ごとに傾向を見てみると、「社会的要素」と「位置関係要素」では、屋号が地名全体に占める割合が非常に多いのに対し、「自然的要素」の屋号が地名全体の中で占める割合が低いことが分かる。人間の住む家やその居住空間は、地形や自然と切り離された人為的なものである。そのため、家に冠せられる名称（屋号）は地形等に関係なく、人為的に作られるケースが多いと考えられる。結果、屋号には、家の「社会的要素」や「位置関係要素」を持つものが多くなる。この家に冠せられる屋号と土地に冠せられる狭義の地名の差異は、人間の介在度の強弱によっているのではないかと考えられる。

（３）地名の空間分析

次に、地名が存在する場所（立地）を調べることで、空間的に地名を分析する方法を紹介する。ここで

は、古文書などの歴史資料を併用して用いることで、地名や集落の歴史を明らかにした事例を紹介したい。

地名の現地比定　香美市物部町に関する地名を見てみよう。仙頭名（のちの影仙頭村）の境界を記した応永 23（1416）年の文書（『土佐国蠹簡集』蠹 111 号）には、多数の地名が書かれている。北側の境界が書かれた箇所が以下である。

「限北ヲシャウシ屋敷ノ爪ヲ堺、山モト堂ヲヤケヤノタワヲカナワ足ヲ堺テ、カナワ足ヲ栗ノクホノエミヲ堺テ、ツツミノトウヲフキサロノ下ナルエミヲ堺テ、次ニアサシクノ下ナルエミヲ堺テ、柿ノモトマテ」

仙頭名では、現在は小字に残らない「カナワ足」「フキサロ」「柿ノモト」など多数の小地名が 15 世紀には使われていたことが分かる。一方、「庄司屋敷」「ヤマモト堂」「ヤケヤノトウ」「栗ノ久保」は小字や通称地名として現在も使われており、当時は隣の押谷名（のちの押谷村）との堺にある境界地名だったことがうかがえる。「ヤケヤノトウ」は、漢字をあてると「焼け野峠」で焼畑に関連する山の地名である。「栗ノ久保」は、クリが取れる窪地を指す山の地名である。実際に現地で見てみると、大字・押谷との字界に近い場所に「庄司屋敷」「ヤマモト堂」「ヤケヤノトウ」「栗ノ久保」が連続して確認できる（図１）。これを見ると、15 世紀の押谷名との境界は現在の字界よりやや西側にあったことが分かり、山地が焼畑や栗畑として利用されていたことが分かる。

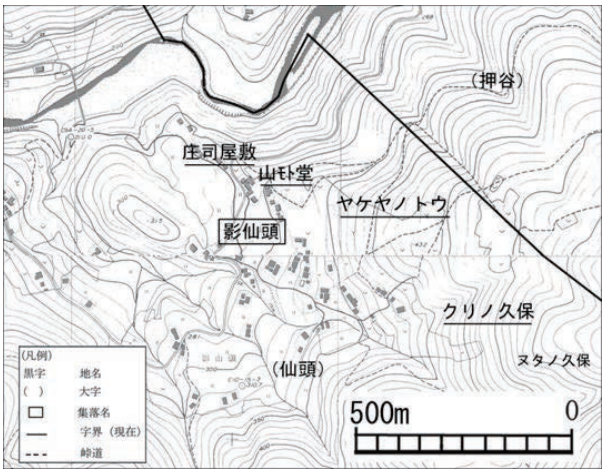


図１　室町期の文書記載地名の現地比定

集落の景観復元　次にもう少し広範に歴史資料に登場する地名を現地比定し、集落の景観を復元する方法を紹介しよう。ここでは、戦国期の太閤検地の台帳『地検帳』を利用する。

物部町の『地検帳』記載地名の残存率は約 90％で、400 年以上前に使われた地名が今も残っている。そこで現地で聞き取り調査・踏査を行い、『地検帳』に書かれた仙頭村の地名の位置を特定した。

室町期の文書の境界線の推定地

仙頭村は、荘園・大忍荘に属し、その専当職を務めた専当氏の本拠地であった。近世初期（1588 年）の『地検帳』では、屋那ノ上村、山崎村、専当村が現在の大字（＝江戸期の影仙頭村）の領域にあたる。このうち『地検帳』記載に記載されているホノギ（地名）は聞き取りによってほぼ現地比定することができ、現在も残る屋号から当時の屋敷の位置も特定できる。

現地比定した地名を地図上に落としていくと、近世初期の仙頭の集落景観が復元できる（図２）。まず、仙頭村の領域である現在の仙頭集落では、さきほども述べたように、槇山川を挟んで対岸にある屋那ノ上村の飛び地（「中野」・「下クボ」・「上クボ」・「クリ谷」）、山崎村の土地（「中コミ」「下コミ」）が近くにあり、江戸期の領域と異なり、「大谷」を堺に西側は別村の土地だったことが分かる。名主屋敷である「土居」（下山畠ヤシキ）の周りには収量の良い中田（「畠田中」）が存在しており、水掛りがよい初期に開発された「土居田」と呼ばれる名主占有の田であったことが推測される。また、田地は小浸食谷（「井ノ本谷」「ツボネ谷」「宮谷」）の脇に所在する迫田（谷水田）に限られ、畠地が多くを占める。現在、見られるような長距離水路を伴う石垣棚田はまだ存在していないことが分かる。

また、「大谷」を挟んで東側に屋敷が散居的に点在。屋敷は全て「山畠ヤシキ」で、屋敷の周りに畑を伴

う前園集落（垣内的居住様式）であることが分かる。近世以降には集村化が進み、屋敷―田―畑の形態へ変化していったと考えられる。

注目すべきは、「大谷」掛の田んぼが存在せず、「大谷」をさけるかのように集落が東側、西側に寄って存在している点である。村に伝わる「大谷の大ハケ（洪水）」の伝説はこの事象を解釈する鍵となる。水量の多い「大谷」は、水田への水利に大きな利点を生み出す一方で、洪水のリスクも伴っていた。『地検帳』段階で、集落や田畑が「大谷」周辺に存在しない理由は、洪水を避ける、災害から村を守るという村人達の知恵の結果であったのだろう。

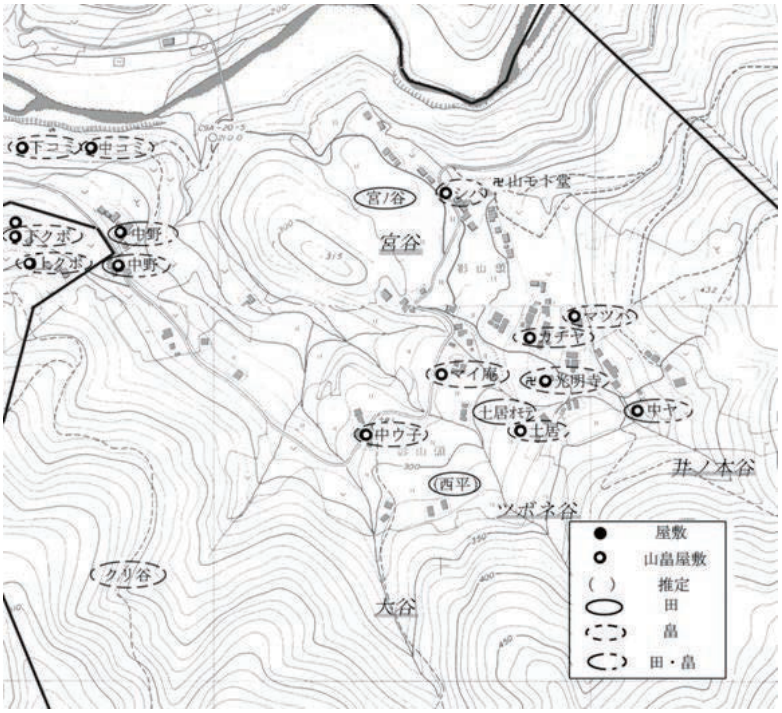


図２　『地検帳』地名から復元した影仙頭村の村落景観

一方で、「大谷」のような大きな谷の水をコントロールする土木技術はこの時期にはなく、近世期以降、村人達は谷からの長距離灌漑用水路を整備することによって、水利の問題を克服し、迫田型棚田を長水路型棚田へと変え[24]、石垣棚田が続く村の景観を形作っていったと推測される。現在では、集落は「大谷」周辺にも所在するようになり、「大谷」掛の田んぼがほとんどとなり、「大谷」から引かれた長距離用水路が田と屋敷の間を巡っている。

このように地名を用いて集落景観を復元することで、自然とどのように村人が向きあって生活していたか、土地開発を進め生産力を向上させてきたかを検証できる。地名の意味だけを問うのでなく、地名を歴史資料として文献資料や伝承、地形などと複合して実証的に検証することで、自然と人間の関わりをより具体的に復元することができるのである。（楠瀬）

４、九州大学式地名調査法

上記のような地名収集・現地比定・分析の基礎となるのは、集落のフィールドワークである。ここでは、九州大学服部英雄研究室が行ってきた集落調査（地名民俗調査）の方法を紹介する。

（1）調査の目的

全国の中山間地域では、住民の高齢化、減少が進み、集落維持が難しくなる限界集落が増加している。その中で山の生業や生活様式の変化や開発の影響もあり、山村特有の生活様式や歴史・民俗も忘れ去られようとしている。地名もその一つである。

農村開発やほ場整備が進んだ 1970 年代、80 年代には、変わりゆく農村の姿を記録しようと多くの研究者や郷土史家が農村を調査したが、辺境部の漁村、山村などは調査対象外で十分な調査が行われていないのが現状だ。その反面、山村や漁村では開発の進行や生活様式の変化が遅かったがために、古い歴史や民俗、生活の記憶やその痕跡が土地に残っている。高齢化や集落消滅が進み、多くは失われているが、集落

[24] 海老澤衷 1997「棚田と水資源－豊後国大野荘の場合」『月刊文化財』400 号

が長く引き継いできた「民衆知」は奥深くかつ膨大で、古老への聞き取り調査によってまだ記録できるものはたくさんある。このような「民衆知」は文字に書き残されず、住民の記憶の中で伝承されているケースが多い。その記録は、山村が過疎によって廃れていく中で、今はすぐに必要ないかもしれないが、後世に再び地域を興していく際必ず貴重な資産になる。

集落調査の目的は、①地名や歴史、文化、民俗の記録保存に加えて、②地域の歴史や生業の特色を明らかにして住民にその価値を再認識しもらい、③住民らが地域資源として活用してもらえるような形に持って行くことだ。調査者が地元から聞き「取る」だけでなく、「還元する」プロセスが実行できたら理想的である。すなわち、歴史を「記録」「掘り起こし」「普及」作業[25]の実践だが、これはすぐには困難である。

まずは江戸時代の歴史家たちが近世の村を調査して書き記した「南路志」や「土佐州郡志」のような“平成版地誌”の作成を目指し、集落の人や後世の人に役立ててもらえるような活動を目指している。

（2）調査の方法とプロセス

【調査地域】集落調査は大字単位で行う。大字はおおまか江戸時代の旧村にあたり、地誌など古記録も大字単位でまとめられている。現在も町内会の領域にあたり、集落として把握・総括がしやすいためである。

【調査手順】まず①綿密な文献調査をし、集落の歴史や特色を把握した上で、②古老への聞き取り調査[26]・現地踏査をし、③収集した証言を地図や活字で記録してデータベース化する（報告書作成）作業を行う。

（3）文献調査

調査地域の地理や産業、歴史、文化財、地名などについて事前に把握しておくと、聞き取り調査の段取りが組みやすく、質問の幅も広がる。『角川日本地名辞典』の各村の記述や、『西土佐村史』『窪川町史』『大正町史』『十和村史』などの自治体史、関連の論文のほかに、中世の『長宗我部地検帳』、近世の『下津井御留山文書』（寛政５（1793）年～明治６（1873）年、約 60 点）、近世の地誌『南路志』『土佐州郡志』を読んでおき、地名や歴史の情報を抽出、インプットしておき、質問項目も考えておく。

文書や文献は作成年が明らかであり、時間軸の分かった資料。そこに書かれていることは、今も行われているのか、昔（大正・昭和期）はどうだったかなど、事象の変化を聞き取り調査で質問し、過去の文献に記載されていないことが分かったらもうけもの。過去の文献に書かれているのと同じことを聞き取っていると時間ロスになるので注意すること。

（4）聞き取り調査

【用意するもの】

１調査地（大字）に関する主要文献のコピー。

2 聞き取りノート

3 筆記用具（色ペン、ラッションペン、ボールペン、鉛筆等）

4 テープ（IC）レコーダー

5 地図（住宅地図・森林基本図（都市計画図など））

6 カメラ

【聞き取りの方法】

先に述べた聞き取りの証言の資料価値を少しでも高めるために、各集落１人の詳しい人に聞くのでなく、

---

[25] 楠瀬慶太 2013「地域再生の歴史学」『地方史活動の再構築―新たな実践のかたち』雄山閣

[26] 聞き取りによって得られた証言は貴重なものだが、話し手の記憶によるものである以上、時間軸や事実関係が不明確な部分があり、歴史学における資料価値は決して高いとは言えない。歴史学における史料等級は、同時代の古文書（一次史料）＞古記録（日記）＞地誌＞後世の編纂物となっており、文字で同時代に記された史料の価値が高く、聞き書きなど後世に記されたものは信頼性の劣る二次史料になる。また、聞き取り調査には、文献などに依拠して住民が、研究者の好むように民俗を誇張・創作して話したり、見せたりしてしまう「フォークロリスムス」（創られた民俗）の問題も存在している。

２～３人に聞くと証言の相互批判ができる。聞き取りの時間は１人２時間程度、あまり長すぎると互いに疲れる。こちらが要点を整理してコンパクトに聞いていく。やはり昔のことは「古老」と呼ばれる 80～90 代の人が詳しいが、年代や性別に限らず、色々な方に聞き取りしてみるとよい。地名や生活の話は、集落で長く暮らしている人や区長経験者らが詳しい。当たり前だが、田畑の地名は農業従事者、山の地名は林業従事者、海の地名は漁業従事者が詳しい。仕事や会合など集落外での活動の多い男性に比べて、女性は地域のコミュニティに根差して暮らしており、男性とは異なる視点の生活感のある話が聞ける場合が多い。また、女性は他集落から嫁に来ている場合も多い。地図や資料があって時間があれば、ついでに他の集落のことも聞いてみるとよい。

地名民俗調査の様子

導入部として「地名」の現地比定から始める。地名は土地に生きる人が、土地利用のために用いるものであって非常にローカルではあるがなじみ深いもの。集落外から来た調査者がローカルな地名に興味を持つことで、警戒感もなくなり、話も広がる。地名を聞くことで、集落の空間把握もしやすく、地名を切り口に話が広がる。それを地名の属性としてどんどん記録していく。住宅地図や森林基本図などの地図を広げて話を聞いていこう。

あらかじめ小字を地図に書き込んでおくと話が理解しやすい。話に出た場所にすべて行って確認するのは難しいので、地図を使って空間情報を把握しながら話を聞こう。住民は地域の地図が頭に入っているので、地図を見ながらでも話はできる。『地検帳』や地誌類に載っている未知の地名（小字に載っていない地名）を書き出し、それから聞いていく。隣接する小字の情報も聞いていこう。田んぼだったのか、畑だったのか、谷なのか、平地なのか、どんな謂われがあるのかなどできるだけ詳しく聞こう。未知の通称地名が聞けた場合は、すかさず地図に記入し、関連する情報をノートに記しておきたい。

地名以外でメーンに聞くのは、古老が地域で過ごした「大正・昭和期の村の姿」。できれば、エネルギー革命によって山資源が必要とされなくなり、農林業の衰退が始まる前の大正～昭和前期の「豊かな山村」の様子を聞き取りたい。調査者は「いつごろの話か」「誰に聞いた話か」をできるだけ聞いて、証言の時間軸、出所を明確にしておく。

聞き取りは複数人で行う場合、１人が質問してメモを取り、１人が地図に描き込むやり方が良い。一定一人が聞いたら、もう一人にも質問してもらう。視点が変わり、新たなことが聞ける場合もある。

聞き取りが終わったら気になった場所、重要だと思われる場所を見て写真を撮ろう。地域の人も案外集落の写真を撮る機会は少ない。写真は現在の村や地域の様子の記録にもなる。写真はできるだけたくさん撮ろう。最近のデジタルカメラはＧＰＳ機能が付いており、位置情報（座標）の記録もできるので一石二鳥だ。

【聞き取り項目】以下のような項目を参考に古老らに順に質問していこう。

◎地名

小字、大字、行政文書、地図などに記録されていない地名を聞き、地図に描き込み、ノートに記録する。地名は由来・意味や漢字も聞き、作られた作物や何があったか（土地利用）、その場所での出来事・伝説なども聞く

①集落名（大字内にも複数の集落がある）

②屋号（なくなった家の場所も聞き取って地図に記録。近代の村を空間的に復元する）

③『地検帳』、地誌類、文書類の記載地名で、小字・地図等に記録されていない場所

④神社・仏閣・石仏（信仰に関わるもの）　　⑤谷・山・田・畑・用水路・橋・渕の地名

◎集落

集落の中には消滅したものや人が居なくなって小規模化したものが多く存在する。大正・昭和期の集落の所在、屋号、村役場などの公共物について述べ、集落の様子や思い出を聞く。

◎生業・土地開発・水利

大正・昭和期に村の産業となっていた農業や林業などについて聞く。村ごとに地形や環境をうまく利用した生業が展開しており、これらから村の個性を明らかにしたい。また、それらと関連した土地開発・水利についても聞いてみる。

◎交通・流通

交通の要衝で、中継拠点となる地域や物資の集散地となる地域では、様々な交通（道路・峠・橋・川渡し）・流通（養蚕・木材流し・行商・森林鉄道）の側面が現れる。これらは、点で理解するものでなく、線で理解するものであると考えるので、村を横断してこの地域の交通・流通を聞き取る。

◎生活

過去には、信仰、祭り、結婚、隠居、葬送、娯楽、伝説など様々な民俗が各村に日常的に存在していた。これら気になった項目についていろいろ聞いてみよう。

◎その他

ほかにも、家にある民具や古文書、集落の五輪塔などの石造物、地域の自然や名所旧跡なども調査の対象になる。

【聞き取り項目キーワード】

質問に困ったときのキーワードとして以下のようなものがある。聞き取りの参考にしてほしい。

地名（田・畑・山・谷・淵・石・用水路・橋・屋号・瀬・浜など）

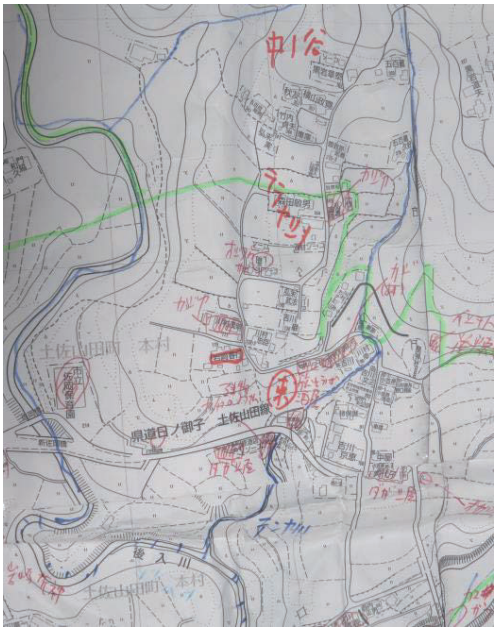
生業（漁業・農業・狩猟・採集・炭焼・牛馬・林業）

集落（庄屋の家・土居・本家分家関係）

流通（牛馬・木材・漁具・出荷・行商）

交通（道路・橋・峠・渡船）

生活（信仰・祭り・結婚・葬送・青年組・遊び、伝説、戦争体験、災害）　　（楠瀬）



地名調査地図

５、本書の構成

第１章「入門編―土佐の地名の調べ方―」では、地名の調査研究方法について概説してきた。第２章「実践編―四万十の地名を歩く―」では、高知県西部の四万十地域を対象に地名調査・研究を実践し、その成果を報告する。

大字（中世の名・近世の村の単位）ごとに以下のように、集落の景観・歴史・民俗を詳述する。『長宗我部地検帳』から戦国～近世初期の村の姿を探る「『地検帳』に見る村落景観」と、古老の聞き取りなどをもとにした「昭和期の村の姿」の２章立てで、以下のような項目について詳しく見ていく。「『地検帳』に見る村落景観」では、『地検帳』から復元できる（１）集落の様子（２）土地開発・水利の状況について主に検討する。「昭和期の村の姿」では、以下の項目について聞き取り調査から村の様子を詳述する。

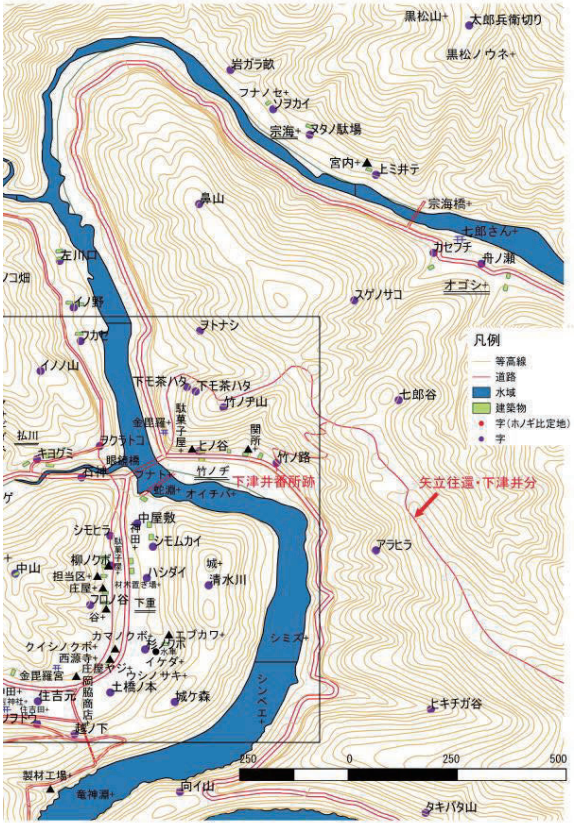
（１）地名　調査の中心となった地名調査の成果を報告する。大字ごとに地名地図を掲載する[27]。地図では、小字などの既知地名については「黒字」（かつ紫の●）、新出地名については地名の最後に「＋」、『地検帳』記載の地名（ホノギ）には「赤の●」を付ける。集落名は「＝」（二重線）を引き、屋号は▲（または「屋号」表記）で示す。地名集成表（エクセル形式）については、「四万十町地名辞典」のホームページで順次公開する。全ての地名を紹介することはできないので、いわれのある地名や特徴的な地名について説明する。

（２）集落　集落の中には消滅したものや人が居なくなって小規模化したものが多く存在する。大正・昭和期の集落の所在、屋号について述べる。

（３）生業　聞き取りによって明らかになった大正・昭和期の村の生業について述べる。村ごとに地形や環境をうまく利用した生業が展開しており、これらから村の個性を明らかにしたい。また、それらと関連した土地開発・水利についても述べる。

（４）交通・流通　交通の要衝で、中継拠点となる地域や物資の集散地となる地域では、様々な交通（道路・橋・川渡し）・流通（繭・木材流し・行商）の側面が現れる。これらは、点よりも線で理解するものであると考えるので、村を横断してこの地域の交通・流通を見てみたい。

（５）生活　過去には、信仰、祭り、結婚、隠居、葬送、娯楽など様々な民俗が各村に日常的に存在していた。聞き取りによって明らかになった人々の日常について、断片的ながら述べる。



四万十町下津井の地名地図

第３章は「地図編―森下画伯の地名地図―」と題して、第２章で紹介した地域の歴史や民俗を描いた色鮮やかなガイドマップを紹介する。第４章は「分析編―土佐の地名を探る―」で、災害地名や山・川・焼き畑の地名などについて分析した論考を掲載する。第５章「伝承編－地名を残し伝える―」では、地名調査や研究の課題について述べる。

（楠瀬）

[27] 地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て同院発行の基盤地図情報を使用している（承認番号　平 29 情使、第 1207 号）。